【三題噺】Stellar Place

うるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【三題噺】Ｓｔｅｌｌａｒ　Ｐｌａｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ１３４２Ｗ

【作者名】
うるる

【あらすじ】
「文学少女」シリーズより三題噺
お題は【オーロラ】【欝】【手紙】
オーロラをめぐる二人のお話。

お題【オーロラ】【欝】【手紙】

「あたし、オーロラを見る前に死んじゃうんだ。いつもの所で待ってるから。待ってる。あなたが来るまで待ってるから。」

御子(みこ)は気分は最高に欝だった。最愛の貴恵(きえ)がこんな置き手紙を残してどっかに行ってしまうなんて信じられなかった。

しかも死んでしまうだと？冗談も大概にしろよっ！！

御子は手紙を掴み取り、勢い良くどこかに捨てたかった。しかし腕を振り上げた時点で手が止まる。別に望んでもいないのに、欝という気分がまたのしかかってきて、まるで取り付かれたかの様に腕が鉛の如くゆっくり落ちていく。

手紙が再び元あった机の上に戻る。御子は重苦しい溜め息を吐く。どうしよう。どうしようもならないのか。どうにかしろよ。どうにでもなるだろ。

欝のループ。負の連鎖反応。

ここで思考回路を止める。無駄だ。無駄な事ばかり考えてる。こんな事考えても何も答えは出ないと分かっているんだから。

ふと我に帰って、後ろを見ると両親が心配そうに立っている。

「お母さん、日没の時間は？」

「あと三時間ってとこかしら。」

「お父さん、北にある天体観測場までどのくらい？」

「三時間だよ。日没までに間に合わないかもしれない。」

「いいよ。最後まで諦めないし。」

そうして僕らは急いで車に乗り込み、北の天体観測場へ向かった。

後は自分と自分との勝負だった。手紙を握り締め、ただただ何かを

祈るだけだった。勝手に貴恵との記憶が蘇っていく自分と、その記憶の放出を止めようとする自分。あぁ…欝ってこんな気分だったんだ。こんなにも激しいのに、こんなにも何もない。今更そんな事に気付いた自分は一体何なのだろう？
車は時にスピードを早め、時に渋滞に巻き込まれ、その度に自分の胸が締め付けられ、不安の波が押しかかる。
車の中でじっとするのが嫌だ。けれども僕が動いた所で何も起こりやしないのも分かっている。車が到着するのを祈るしか出来ないのに身体がずっとソワソワしている。
気分を落ち着かせようと窓の外を見るとどんどんと空色から茜色に変わりつつ空に更に動揺する。
間に合わなくても後悔しないというセリフには語弊がある。ここまで来たのだから間に合って欲しいというのが本望だ。そしてその本望が間に合うか間に合わないかの瀬戸際。

空が茜色から藍色に染まり始める時。僕らは北の天体観測場に到着した。着いた時、僕は居ても経ってもいられなくなり、急いで天文台へ走った。
天文台に入ると、そこは真っ暗だったので手探りでスイッチを探した。
パチン、電源が入って球体の部屋が映し出される。そしてその真ん中に立っている一人の少女。
「貴恵ッ！！」
僕はすぐに貴恵の元に近づき、抱きしめる。身体が冷たい。
どれだけの時間、ここに立っていたのだというのか。どれだけの時間、ここで経っていたのだろうか。
頬に手を乗せる。冷たい頬。涙の跡。そして再び流れる新たな涙。
「御子…来てくれたんだね。」
「あぁ、決まってるじゃないか。」
「あたし、もうだめなんだって。もう死んじゃうんだって。」

涙と共に溢れ、零れてゆく言葉。貴恵はもう止まらない。
「だからさ、御子と一緒にオーロラが見たかったの。最後に、ほんとに、最後に。」
ワガママ言ってごめんね、御子。と彼女は涙ながら、笑ってそう言った。笑うのだって精一杯のハズなのに彼女は笑った。
「あぁ、見よう。二人でオーロラを見よう。」
僕は急いで機材のスイッチを押した。中央の球体のプラネタリウムが動きだす。
僕と貴恵は部屋が暗くなる前に近くの席に座って、お互い手を堅く繋いで、二人で頭上を見上げた。
部屋がだんだん暗くなり、それとは逆にプラネタリウムが光を帯び始める。すると頭上にゆっくりと色が浮かび上がってくる。
光のカーテン、オーロラ。
言葉で表現できない。この様々な模様を放つこの景色に絶景という言葉しかいつも出てこない。
でも、今日はオーロラよりも貴恵を見ていた。
オーロラを見上げ、ぽたりぽたりと涙を流す彼女。
次第に貴恵の涙が止まってきた。貴恵の繋いでる手も冷たい。貴恵の手の力が抜けてきた。目を閉じて、ゆっくり息を吐いて—
ありがとう。

あぁ…このままずっと君と居れたらな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1342w/

【三題噺】Stellar Place

2011年10月4日22時16分発行